

戦わぬため オバアは闘う

表題は中日新聞 1月5日「面魂」のタイトルである。遅くなったが、心に残る記事なので紹介したい。「面魂(つらだましい)」は、広辞苑によると、「並々ならぬ強い精神が顔に現れていること」

「新基地反対!」「新基地いらない!」。年の瀬なのに、額から汗がにじむ。沖縄県名護市辺野古の米軍キャンプ・シュワブのゲート前。新基地建設に反対する市民たちの声が響く。抗議者の中に87歳のオバア、横田チヨ子はいた。「基地があるから、



爆弾が落とされ、弾が打ち込まれる。なけりゃ、攻撃されない。私はサイパン島で経験しているんだよ」

そう話す横田の自宅は新基地への移転が計画される米軍普天間飛行場宜野湾市の近く、バスで片道1時間半かかるが、一昨年7月から、辺野古での座り込みに加わっている。「誰が言ったか知らないけれど『座り込みの日当が3千円』なんてウソ。往復のバス代千円を払って、弁当をつくって来ている。年金暮らしには痛い。でも、子や孫の時代に戦争を起こさせてはいけない」

太平洋戦争前、サイパン島など南洋群島は日本が委任統治していた。日本は開拓のため、主に沖縄で移民を募集。最盛期で約5万5千人が沖縄から渡った。1万人以上の民間人が犠牲になったとされるサイパン島。ふと振り返れば、日本軍の基地が落ちれば、米軍の攻撃は収まっていた。「基地があったから狙われたんだ」と感じた。「ウチナンチュー(沖縄人)はサイパン島でだまされてのたれ死んだ。また沖縄はだまされるのか。戦火をくぐり抜け、生かされている私の使命は、サイパン島の悲劇を繰り返させないこと。基地がなければ、沖縄は攻撃されない。それが私の最後の仕事」

「普天間も新基地もいらない」と、オスプレイが配備された普天間飛行場の爆音訴訟の原告に加わり、辺野古では座り込む。だが、目の前の機動隊や警備員には手を上げない。目前に立つ彼らにはアメ玉を与える。「そっと口に入れなさい。基地には反対だが、あんたとは闘っていない。それとこれとは別だ」と。安倍政権が実力行使で進める新基地建設。横田は話す。「どんなに時間がかかっても、話し合いを続けなければいけない。それが民主主義。私たちの闘いは戦争を起こさせない、戦わないための闘いです」

(2016年1月16日)